

1. 枠にとらわれない柔軟な活動が可能

地域による子ども農業・農村体験活動

◆期待が高まる地域・家庭の役割

平成14年度より「完全学校週5日制」がスタートし、子どもたちが地域や家庭で過ごす時間が増え、子どもたちを育む地域・家庭の役割が見直されています。しかしながら、「子ども会」をはじめとする地域コミュニティの脆弱化、生活環境の都市化・管理化にともなう自然や遊び場の減少など、地域における受け皿は必ずしも十分でないことが問題視されています。

また、子どもたちに実体験の機会が不足しているとの共通認識にもとづき、全国の小中学校で体験的な要素や問題解決型の学習を重視する「総合的な学習の時間」の導入がなされ、全国で学校や地域、その連携による子どもたちの「多様な体験の機会づくり」が進められています。

◆枠にとらわれない柔軟な活動が可能～地域による体験活動

学校が「総合的な学習の時間」等の時間において、地域内のフィールドを使って体験活動を行う際、時間内の移動、地域からの人的支援を要するなど、多くの制約が立ちまわります。週末や長期休暇に行う地域による活動は、その点、比較的枠にとらわれない柔軟な活動が可能です。(他方、活動主体が教育関係組織でないケースが多く、ボランティアベースによる活動が多いことから、また別の面での制約もあるが…)

また、地域資源を活用した多様な体験要素の導入といった観点からも、地域による活動はそれぞれの地域が持つ特性を發揮しやすいものと思われま

◆優れた学習素材を提供する子どもたちの農業・農村体験

地域による子どもたちの体験活動と言っても、自然活動、職場体験、ボランティア体験など、様々な活動があげられます。そうした中、農業・農村体験は多くの地域で取り組まれ、継続される人気活動となっています。次に農業・農村体験が体験活動として優れた点を示します。

農業・農村体験で広がる

農業・農村は、子どもたちに、たくさんの“きっかけ”を与えてくれる。からだ全体を通して知性・感性に働きかけ、それぞれの世界を広げてくれる。なぜなら、農業には、人が生きていくために必要なさまざまな要素があるから。それらが互いに結びついて、地域社会が成り立っているから。だから、農業・農村体験を通じて、子どもたちは総合的な「生きる力」を育んでいくことができる。



発見する

- ◇さまざまな昆虫がいること、土や水の中にもいろんな生きものがいることに気づく。
- ◇土づくりや水管理、品種改良など、人はさまざまな工夫をしていることに気づく。



感じる

- ◇自分で育てあげたお米や野菜、世話をした乳牛や馬に思いを寄せ、いとおしく思う。
- ◇田んぼの泥のぬるぬる、穂った稲の重さ、触ったヤギの鼓動、卵の温かさを感じる。



知る

- ◇農作業での体や手の動かし方、重い物や壊れやすい物の扱い方、道具の使い方を学ぶ。
- ◇おじいさん、おばあさんに話を聞いたり、昔の作業を再現して、先人の知恵や努力を学ぶ。

子どもたちの世界



つくる

- ◇ 藪やツルで昔の生活用具や遊び道具を手作りしたり、間伐材や竹で炭を焼く。
- ◇ 収穫した作物を使って、味噌やジュースなどの加工食品、地域の伝統料理をつくる。
- ◇ 体験をもとに作文や観察日記を書いたり、ホームページ、劇やビデオ作品を制作する。

考える

- ◇ 農作業のそれぞれの段階で、なぜ、こうするのか、してはいけないのか、思いを巡らす。
- ◇ 何か難しいことが起こったとき、失敗しそうなどとき、どうすればいいのか、考える。
- ◇ 生きもの同士のつながり、自然と人との関わり、自分とそれらの関係について考える。

食べる

- ◇ 生産→加工→流通→料理→食べるまでの過程に興味をもつ。
- ◇ 野菜など、愛情をそそぎ大切に育てたいのちを、感謝しながらいただく。
- ◇ いっしょに働いた仲間や、農家のおじさんやおばさんたちと、団欒のなかで食べる。



交わる

- ◇ 豚や牛や鶏を育てたり世話をするなど、ベッドではないかたちで生きものにふれる。
- ◇ 体験のなかで昔の暮らしと今の暮らしが入り交じり、温故知新を知る。
- ◇ 子ども同士で育ちあい、子どもと大人が学びあい、子どもと地域、農村と都市が交わる。

◆子どもたちの生きる力のもとになる

- ◇ 農業体験を通じて、子どもたちは知性と感性をバランスよく伸ばしていく。
- ◇ 時間と空間を他者と共有することで、子どもたちは柔軟性と自発性を育てていく。
- ◇ 農作物の栽培や動物と接することで、子どもたちはいのちを尊ぶこころを養っていく。

◆大人たちや地域が元気になる

- ◇ 農業体験への取り組みが、親や教師、農の側（生産者・家族）、地域を変える契機となる。
- ◇ 地元に着目した活動を展開することで、地域性の発見・見直し、創生の手がかりを得る。
- ◇ 子どもが地域社会に参加することにより、地域全体に活気が生まれる。

（イラスト：長野亮之介）

出典：『農業体験で子どもたちに生きる力を～子ども農業・農村体験のすすめ』

子ども農業体験学習中央推進協議会・文部科学省・農林水産省・全国農業協同組合中央会

子どもたちに優れた学習素材を提供する農業・農村体験

・「いのち」を相手にする活動であること

動物はもとより、毎日少しずつ成長する農作物（植物）と向きあう中、子どもたちは知らず知らずの間に自分と「いのち」との関わりにふれる機会を得ます。動物の生と死に立ち会う、農作物がうまく収穫できたり、途中で枯れてしまったりする経験を通して、子どもたちは自分と「いのち」の関わりを心に刻んでいきます。

・地域のひと・生活環境・生業の中に分け入ることができる活動

地域における農業・農村体験を通じて、子どもたちは自分と異なる生活環境や人々、生業、考え方の中に分け入った体験をすることができます。農業・農村体験は、全国各地どこでもそれぞれの文化を有しています。農業・農村体験を通して、子どもたちが自らの地域にふれ、考える活動が可能です。子どもたちは様々な現場で、そこにいる人々とふれあい「共感」をともなった「問題意識」「学び」の機会を得ることができます。

・私たちの「暮らし」に直結する活動

私たちが毎日とる食事。しかし、分業による産業の近代化、都市化が進んだ今日、私たちは食べものがどこでどう作られるのか、知らないことの方が多くなっています。いつの間にかできてしまった「食と農の距離」は、知らないがゆえに食材を形状のみで判断してしまう、本当のおいしさにふれたことがないといった現状につながっています。そうした意味でも農業・農村体験は、これからの私たちの生活や社会を考える上で大きな意義を有し、子どもと大人と一緒に考えるにふさわしい、身近でありながら社会の在り方を考えることのできる優れたテーマとすることができます。

さらに、子どもたちが土に直に触れ身体を動かすこと、子どもどうし、大人と子どもが普段とは異なる価値観の中で一緒に作業するといった日常とは異なるコミュニケーションとなるなど、農業・農村体験は子どもたちの成長にとって重要な体験の機会を多数含んでいます。